



Title	上昇のための条件 : 『闘技士サムソン』 試論
Author(s)	山津, さゆり
Citation	Osaka Literary Review. 1991, 30, p. 22-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25456
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上昇のための条件

—『闘技士サムソン』試論—

山 津 さ ゆ り

I

『闘技士サムソン』に関して従来、この劇の主題がギリシャ的であるかヘブライ的であるかとか、あるいはキリスト教との関係はどうかということについて論じられてきたが、私はサムソンの人間性に着目し、人間一般に通ずる普遍的な問題を扱ったものとしてこの劇を考えたい。

サムソンは、確かに神によって選ばれてペリシテ人からのイスラエル解放という使命を帯び、髪に神聖なる力を宿されて、この世に生まれてきたのだが、ミルトンの描いているサムソンにおいては、彼の人間性に重点が置かれ、彼の墮落の自覚、激しい絶望が強調されている。過ちを犯し、墮落することは人間の免れることのできないもの、むしろ人間であるからこそ陥るものである。ただ重要なことは、墮落した人間が、どれだけ深く絶望し、内省するかということである。そして絶望から立ち上がって何かを会得することができるかということである。人生においては必ずしも特定の宗教に限らずとも、苦悩や葛藤を克服し、最善なる存在としての神に対してどれだけ真摯な信仰心をもつことができるかということが、最も大事であるように思われる。

私は、本論では必ずしもキリスト教的立場からではなく、一人の人間としてのサムソンの絶望と信仰を考察し、更にそれと対照をなすものとしてのペリシテ人の軽薄さを考察してみたい。

II

サムソンは、二度目の妻デリラの四度目の誘惑に遂に屈し、絶対に明か

してはならない重大な秘密、つまり彼の怪力の源が髪の毛にあることを明かしてしまい、デリラとペリシテ人の罠にかかって髪の毛を剃られ、両目をえぐられてしまう。そして、足かせをされて奴隷と共に粉をひく身となる。劇は、ペリシテ人の崇める偶像ダゴンの祭典のために、サムソンが休息を与えられ、足かせをつけたまま一人ガザの獄舎の前の土手に向かって手探りで盲目の足を進めているところから始まる。

A little onward lend thy guiding hand
To these dark steps, a little further on;
For yonder bank hath choice of sun or shade. (II. 1-3)¹⁾

サムソンは、神の導きを請いながら覚束なく歩んでいるのであるが、彼の目的地は、土手の日だまりか木陰かのどちらかである。しかし彼が日だまりの方に行ったのか木陰の方に行ったのかは明らかではない。ここで私が問題にしたいのは、サムソンがどちらに行ったのかということではなく、“choice of sun or shade”が象徴している意味である。

サムソンは、この後 651 行目までの間マノアやコーラスの対話の中で、現在の悲惨な境遇を嘆き、過去の過ちを悔い、目の光も失い心の中の光も失い全くの暗闇の中で絶望する。しかし、この間の彼の台詞を見てみると、絶望すると言っても、自己を糾弾する気持ちと、自分以外の者、神を責める気持ちとの間の揺れがあるような印象を与える。この揺れを“choice of sun or shade”という言葉が象徴しているように思われる。墮落してしまったサムソンの心の迷いが暗示されていると言うことができよう。彼は、自分の犯した過ちを自分の過ちと認める一方、責任転嫁にすぎないような絶望を示している。彼は自分自身にはっきりとした判断を下すことができないでいるのである。

彼のこのような揺れを顕著に示している箇所を見てみよう。

Why was my breeding ordered and prescribed
As of a person separate to God,

Designed for great exploits ; if I must die
 Betrayed, captived, and both my eyes put out,
 Made of my enemies the scorn and gaze ;
 To grind in brazen fetters under task
 With this heaven-gifted strength?...
 Yet stay, let me not rashly call in doubt
 Divine prediction ; what if all foretold
 Had been fulfilled but through mine own default,
 Whom have I to complain of but myself? (ll. 30-46)

この台詞の大半は、サムソンの神に対する疑念、あるいは神への抗議と解釈できるが、残り4行では、サムソンは神を疑い、非難した自己を戒め、自分の非を認め、己を責めている。サムソンは、自分自身が重大な秘密を明かして過ちを犯し、悲惨な境遇に陥ったにもかかわらず、神によって選ばれ、大切な使命を果たすべく守護された人物であるはずだという傲りがあるために、どうしても自己の置かれている状況に納得がいかないのである。彼は、実に痛ましく惨めな境遇にある自己をシニカルな口調で嘲り、そうすることによって自分を聖別した神を責めているのである。

しかし、サムソンは神に対して抗議をしても、やはり自分の犯した罪の重みから逃れることはできない。彼は、自分の弱さ故の過ちを認めざるを得ない。

とはいうものの、次の台詞にあるように、まだサムソンは神に対する猜疑と自己の責めとの間で揺れ動いている。

God, when he gave me strength, to show withal
 How slight the gift was, hung it in my hair.
 But peace, I must not quarrel with the will
 Of highest dispensation. (ll. 58-61)

力が強くても、心の弱さを思い知らされたサムソンだが、まだ神の意図を憶測して自己の罪から逃れ神に責任転嫁しようとしている。しかし、やはり神を非難してはならないと自分を戒めるのである。

また、Anthony Low が指摘しているようにサムソンには、他人が言っていることを気にするところがあるが、²⁾これは、彼の自己糾弾に純粹でないところがあることを示すものであるように思われる。彼は、自分のことを「神が立派に艦装して託してくれた船を難破させた愚かな水先案内人」(ll. 198-200) に喩え、デリラに秘密を洩らした自分の愚かさを痛切に感じ自責の念に堪えないのであるが、そのすぐ後では次のように自分に対する人々の噂を気にしている。

Tell me friends,
Am I not sung' and proverb'd for a fool
In every street, do they not say, how well
Are come upon him his deserts? (ll. 202-205)

自分に対する他の者の非難に敏感であるということは、サムソンが自分の愚かさを率直に認める一方で、自分で自分に裁断を下す苦しさから逃れ、他人の裁断に身を委ねたいという気持ちがあることを示しているように思われる。自分で自分の非を認め、自己を責めるということは、それほど生易しいものではないのである。このように自己糾弾においても揺れが認められる。

こうしてサムソンは、どっちつかずの状態のまま苦悩にさいなまれ、神から見放されたと感じるようになり、速やかな死を願うようになる。

But now [He] hath cast me off as never known,
And to those cruel enemies,
Whom I by his appointment had provoked,
Left me all helpless with the irreparable loss
Of sight, reserved alive to be repeated
The subject of their cruelty, or scorn.
Nor am I in the list of them that hope;
Hopeless are all my evils, all remediless;
This one prayer yet remains, might I be heard,
No long petition, speedy death,

The close of all my miseries, and the balm. (ll. 641-651)

サムソンは自分を責め、自己の悲惨な状況を当然のことと認める一方、やはり神に選ばれた者としての意識のために神を責める気持ちが頭をもたげてくる。“as never known”という言葉に顕著に示される、神に見放されたという絶望感は、³⁾彼が神に見放されて当然の人間だと思ふ気持ちによるというよりはむしろ、神によって報いられないことに対する不満によるものだと言えよう。“no long petition”という言葉には、サムソンの神への抗議が感じられる。神に願うのは“speedy death”だけでよいというような彼の傲慢さがその言葉の裏に潜んでいるように思われる。

このように、サムソンは、自分を責める気持ちと神を責める気持ちとの間で揺れながら失意の絶望に陥っている。既に述べたように墮落した人間が、どれだけ深く絶望して立ち上がることができるかということが重要なのであり、サムソンはこの意味で、過ちを犯しても絶望を感じることはない人間に比べるとすぐれた人物であると言える。しかし、上で見てきたように、サムソンは、絶望すると言っても自分を本当に責めることができないでいる。けれども私はここに、人間サムソンの姿を見たように思える。人間だからこそ過ちを犯すのであり、絶望してもその中で揺れるのである。絶望に陥っているサムソンは、ミルトンの偽りのない人間描写であるように思われる。

III

次に、サムソンの信仰を考察してみたい。サムソンは、神に聖別された者として最初から神を信じ、信仰をもった者であったが、その信仰が真の信仰であったかどうかは疑わしいように思われる。Anthony Low が、サムソンの墮落以前の栄光は、「傲慢で不十分なもの」であると言っているように、⁴⁾彼の墮落以前の信仰も不完全なものであると言える。彼の真の信仰は、絶望から立ち上がることで初めて生まれるのである。

まず、墮落以前のサムソンの信仰の姿を彼の回想の台詞に基づいて検討してみたい。

サムソンが、自分が同族の女性と結婚せずに、ペリシテの女性、つまりティムナの女性とデリラと二度までも結婚した理由を語っているところがある (II. 219-233)。彼は、いずれも“intimate impulse” (I. 223) によって神意を知り、イスラエル解放の使命を果たすという目的意識をもって選んだ結婚だったと言うのだが、神意を意識し、使命感に基づいて結婚したということは、神によって選ばれた者としてのサムソンの自惚れと義務感の現れであるように思われる。神意というものは本来明確に認識できるものではないのではないだろうか。後で述べることになるがダゴンの神殿に行くことを決心した時にサムソンが感じた“some rousing motions” (I. 1382) と比べると、結婚を決める時に彼が感じた“intimate impulse”がいかに傲慢さと義務感から生じたものであるかがわかる。

また、サムソンが過去の栄光を回顧する台詞 (II. 529-531) から、彼が誰も太刀打ちできない自分の怪力に酔い、自分のことを“like a petty god” (I. 529) と思うほどに自惚れていたことがわかる。すぐ前の台詞で過去の“full of divine instinct” (I. 526) の状態を語っているところからも、彼の墮落以前の傲慢さに満ちた様子が窺える。サムソン自身以前の栄光に満ちた自分が“swoll’n with pride” (I. 532) であったと反省している。

このように墮落以前のサムソンの信仰は、義務感と傲慢さが目立ち、真の信仰ではなかったと言える。

次に、彼の絶望からの立ち上がり、すなわち真の信仰への目覚めを考察してみたい。

神から見放されたと感じていたサムソンはガテの巨人ハラファとの面会の間に、本当の悔い改めをして神に対して全面的な信頼を寄せるようになり、絶望を克服する。彼はその時次のように語る。

All these indignities, for such they are

From thine, these evils I deserve and more,
 Acknowledge them from God inflicted on me
 Justly, yet despair not of his final pardon
 Whose ear is ever open ; and his eye
 Gracious to readmit the suppliant. (ll. 1168-1173)

サムソンは、心から自己の過ちを自己の過ちとし、神の許しをひたすら願ひ、神の慈悲にすがる一人の弱き人間として、絶望を克服したのである。

そして遂に彼は、“some rousing motions”を感じるのである。彼はダゴンの神殿で見世物になることを最初は拒絶していたが、「ここをあなたがどう切り抜けるのか私にはわからない」(l. 1380) というコーラスに次のように言う。

Be of good courage, I begin to feel
 Some rousing motions in me which dispose
 To something extraordinary my thoughts.
 I with this messenger will go along,
 Nothing to do, be sure, that may dishonour
 Our Law, or stain my vow of Nazarite.
 If there be aught of presage in the mind,
 This day will be remarkable in my life
 By some great act, or of my days the last. (ll. 1381-1389)

ここでは、サムソンは、墮落以前の時のようにあからさまに神意を意識していない。彼は“rousing motions”という言葉に象徴されるように完全に絶望から立ち上がり、そして使命を帯びた者としてのわが身を天上の神の手に委ねている。また上の台詞には、“some”や“something”というような漠然としたものを意味する言葉や、どうなるかわからないというようなことを言っているところがあるが、これは神意というものが人間に示される時に人間にとっては、ひらめき、直感、あるいは偶然の成り行きという形で現れるということを暗示しているように思われる。既に述べたが、神意というものは、はっきり意識したり理解したりすることのできるものではない。

い。ただ何かを感じ、何かわからなくても神を心から信じて行動しようとするこのサムソンの姿に、真の信仰の姿を見ることができる。

真の信仰にはこのような偶然性があると言えるが、この偶然性はこの劇における「中」がないということを意味するものではない。Samuel Johnsonが、アリストテレスによって劇に「始め、中、終わり」が要求されたことに基づいて、この劇に「中」がないと指摘して以来、⁵⁾この点が批評家によって問題にされている。Stanley Fishもこの考え方からサムソンがダゴンの神殿に行く決心をしたことや、最後の行為に必然性がないことを論じている。⁶⁾しかし私がここで言っている偶然性は、必然的なものである。偶然でありながら必然的なものである。

サムソンが“some rousing motions”を感じ何かわからないが行動しようとして決意した偶然の成り行きは、既に論じたように、彼が深く絶望して自分の過ちを本当に悔い、通り一遍のものではない徹底的な内省をしたことによって生じた必然なのである。それは人間にとっては偶然なのだが、人間の認識を超越した存在によれば必然なのである。サムソンが決意した瞬間は彼の計算によって生じたものではないが、彼の深い絶望と徹底的な内省があったからこそ生じたのである。キリスト教においては、この偶然性を神の恩寵と解釈されるかもしれないが、私はここではサムソンに訪れた偶然は、彼の深い絶望と内省、苦悩に満ちた葛藤によるものであることを強調したい。

ダゴンの祭典が催された劇場でサムソンが屋根を支える二本の柱の間に休んだことも偶然の成り行きである。ペリシテ人が偶然に彼に休憩を与えるために柱の間に連れて行ったのである (II. 1629-1630)。彼は、柱に偶然に導かれたのである。しかしこの偶然も彼が深く内省して本当に悔い改め、神の開かれた耳と慈悲深い目を確信したことから生じたと言えよう。彼が神の手に身を委ねたという必然による偶然なのである。彼が最後の行為において、二本の柱に寄り掛かったことは、彼が神を信じ、神に身を委ねたことを象徴しているように思われる。というのも、この「柱」という言葉

は、サムソンの出生を告げた天使の昇天を喩えた時に使われた “a fiery column” (l. 27) という言葉を連想させ、神に通じるものと解釈することができるからである。

このようにサムソンの信仰は、深い絶望と徹底的な内省によって本物となるのである。そして、彼は真の信仰に目覚めた時に、義務感からではなく神の使命を果たすことができるのである。あるいはまた、彼の偶然でありながら、必然の最後の行為は神を心から信頼した真の信仰の姿だと言える。

IV

最後に、真の信仰を会得したサムソンに比較してペリシテ人を代表するデリラとハラファがいかに軽薄であるかを考察してみたい。

デリラとハラファが軽薄であるというのは、彼らにはサムソンに見られたような迷いや内省が全くなく、形式的だということである。まずデリラであるが、彼女は初めのうちは自分がサムソンを裏切ったことを許してほしいと彼にしおらしい態度で懇願する。しかし、サムソンの激しい拒絶に会い、彼女は自分の内面のなさを露呈する。彼女は自分が奈落の底に突き落とした相手に、良心の呵責もなく “Only what remains past cure / Bear not too sensibly, nor still insist / To afflict thyself in vain.” (ll. 912-914) と言うのである。彼女は表面的に自分の裏切りを悔い、サムソンに許しを請うているだけで深い内省は全くない。ただ自己を正当化したいだけなのである。さらにデリラは、サムソンによって手に触れるのを拒まれただけで、てのひらを返したような態度をとる。本心から許してほしいと願っていれば、たとえ八つ裂きにされようと自分の方からサムソンに取りすがるはずである。それどころか彼女は、“I see thou art implacable.” (l. 960) と言うのみである。そして、彼女は自分の裏切り、人間として恥ずべき行為をペリシテ人のためにしたこととして正当化し、イスラエル人の間では罵られようとも、ペリシテ人の間では自分の名声が響き渡ることを声

高に予言する (II. 971-994)。彼女にとって罪は人間の良心に関わる問題ではなく、「二つの口をもった名声」(I. 971)によって割り切れる問題なのである。彼女には自分の犯した罪に対する心の葛藤が全くないと言ってよい。

次にハラファに関してであるが、彼もデリラ同様内面がなく、そして傲慢の権化のような人物である。彼がサムソンに会いにやって来た目的が、サムソンの手足を観察し、彼の「外見が高い評判の通りであるかどうか見るため」(II. 1089-1090)であることから、ハラファが内面でなくいかに外面を重視しているかがよくわかる。彼は、サムソンに挑まれても決して近づこうとはせず、彼の力を実際に試そうとはしない。本当に力のある者の前で彼は必死に体面を繕うが、去って行く時には元気を無くすという有様である。

このように、デリラとハラファには内面がないと言える。D. C. Allenは、両者の言動を好意的かつ寛大に解釈しているが、⁷⁾私は、むしろ積極的に彼らの軽薄さを暴くことによって、サムソンの迷い、深い絶望、徹底的な内省というものを浮き彫りにしたいのである。また、象徴的な観点から見ても、デリラやハラファには、サムソンにみられたような揺れや罪の意識から生じる絶望感、内省はもちろんのこと、罪の意識、あるいは墮落の自覚すらないことがわかる。サムソンに近づくデリラは、「美服をまとい、きちんとした帆綱を備え、帆をふくらませ、吹き流しをひらひらさせながら」(II. 717-718)、順調に滑るように進む“a stately ship” (I. 714)に喩えられている。これは、彼女の迷いのなさ、内面のなさを象徴していると言える。またハラファは、サムソンに近づく時、コーラスによって彼の“stride” (I. 1067) から彼と認識される。“stride”という言葉は、彼が迷いのない傲慢な人物であることを象徴している。

サムソンが深い絶望と内省によって真の信仰に目覚め上昇することが、柱という垂直的なイメージによって象徴されることと比較すると、デリラとハラファの動きのイメージは水平的なものであると言える。

V

サムソンは、真の信仰をもつに至ると同時に、神の使命、つまりペリシテ人からのイスラエルの解放を遂行することになるのだが、それは、彼自身の非業の死と下賤の者以外のペリシテ人たちすべての死という悲惨な結果をもたらす。

グゴンの祭典のため劇場で見世物にされた後、サムソンは偶然その劇場の屋根を支える二本の柱の間に休憩のために導かれるが、そこで彼は柱によって象徴される神に寄り掛かることによって建物を崩し、そこに居たすべてのペリシテ人と自分自身の上に屋根全体を落下させることになるのである。彼の死はイスラエルを解放させるための殉教的な死であるが、既に述べたように、彼のこの行為は偶然によるものであり、彼が計画したことではないということに注目したい。彼は偶然柱に導かれ、神に寄り掛かることによって、使命を果たす機会が与えられたと言える。神の使命というものは、人間の計画によってその機会を得られるようなものではないと言ってもよいかもしれない。

一方ペリシテ人の惨殺は、いくらイスラエル解放という使命のためとはいえ、問題を残すところであるが、私はペリシテ人を人間の邪悪な思いの象徴として考えたい。人間を家畜同然に扱い、また見世物にして戯れと遊びに耽るというような行為は、人間の邪悪な心に基づくものである。だからこそ、ミルトンは、劇場の屋根の下で歓楽と陽気とぶどう酒で満たされたペリシテの上層の者たちとサムソンとともに闘技場にいた武装したペリシテ人たちだけを滅ぼしたのである。彼は、青天井の下の下賤の者たちは滅ぼさなかった。この点で「士師記」と異なっており、さらに重要な相違点がある。それは、サムソンが柱に寄り掛かるのを手伝った者が、“lad” (Jud. 16:26) ではなくて、“guide” (l. 1630) となっていることである。Stanley Fish は、“guide”を「士師記」に従って“nameless boy”と解釈し“‘good’philistine”に対する同情を禁じ得ないようであるが、⁸⁾ミルトンがわざわざ社会的責任を負わない“lad”ではなく、社会的責任を負う立場にあ

る者と考えられる“guide”とした意図に着目したい。ミルトンは“lad”ではなく“guide”にすることによって、我々が死んだペリシテ人に対して同情を寄せないようにしたように思われる。

深い絶望と徹底的な内省によって真の信仰を得、神を全面的に信頼するようになったサムソンに、こうして使命を果たす機会が与えられ、そして、彼を通して最善なる者によって人間の邪悪な心が滅ぼされると言うことができる。

注

- 1) John Carey (ed.), *Milton: Complete Shorter Poems* (London and New York: Longman, 1968/71), p. 344.
以下、『闘技士サムソン』からの引用はすべてこの版に拠る。
- 2) Anthony Low, *The Blaze of Noon: A Reading of Samson Agonistes* (New York and London: Columbia U. P., 1974), p. 74.
- 3) 藤井治彦「『闘技士サムソン』試論」(『ミルトン—詩と思想』越智文雄博士喜寿記念論文集、山口書店、1986)、p. 289.
- 4) Low, p. 66.
- 5) Samuel Johnson, “From *The Rambler* (16 July 1751)” in *Milton: Comus and Samson Agonistes*, Casebook Series, ed. Julian Lovelock (London and Basingstoke: The Macmillan Press LTD, 1975), pp. 157-163.
- 6) Stanley Fish, “Question and Answer in *Samson Agonistes*” (1969) in *Milton: Comus and Samson Agonistes*, Casebook Series, pp. 232-244.
- 7) Don Cameron Allen, “The Problem of Christian Despair in *Samson Agonistes*” (1954) in *Milton: Comus and Samson Agonistes*, Casebook Series, pp. 190-194.
- 8) Fish, p. 237.